

我が国で消費されるコーヒーのほぼ一〇〇%は海外から輸入されています。

したがって、私たち日本人は日々コーヒーに親しんでいるながら、農産物としてのコーヒーに接することは全くない訳です。

コーヒーとはどのような国々で、またどんな場所  
で、どのように、どのような人々によって生産されて  
いるのでしょうか？

本誌では、代表的なコーヒーの生産地について毎号  
特集を組み紹介しています。

今回は中米、カリブ海に浮かぶ小さな島国ジャマイカを紹介します。

ジャマイカの面積は日本の秋田県とほぼ同じの1  
万4千4百平方キロメートル、人口は僅かに270万人  
と大変小さな国です。

ところがこの島国の山岳地帯で栽培されるコーヒ  
ーは、そのバランスのとれた良質な味わいと香りです  
界最高級の座に君臨し続けています。

「ブルーマウンテン・コーヒー」です。

コーヒーの愛飲家ならば、ジャマイカと聞いてまず  
思い浮かべるのは、この高品位コーヒーの筆頭ブル  
ーマウンテンでしょう。

特に日本の消費者には人気の高いブルーマウンテ  
ンコーヒーを育むジャマイカとは、どのような産地な  
のでしょうか。

文責 Ⅱ コーヒーブレイク編集部 川崎邦治  
写真提供 Ⅲ 三上桐子

夜明けに青く美しく輝くブル  
ーマウンテン山脈。



コーヒー産地  
の香り12

# ジャマイカ

Jamaica



## カリブ海に浮かぶ森と泉の島…

ジャマイカはキューバから南へ145キロ、カリブ海に浮かぶ熱帯海洋性気候の島です。

面積は僅かに1万4千4百平方キロメートル、小さな島国ですが、その特徴は豊かで美しく変化に富んだ自然環境であると言えます。

ジャマイカの地形の最大の特徴は、東から西へと広がる山脈です。

広大な産地は国土の実に5分の4を占めます。

沢山の小さな川が、中央の高地を南北に流れ、豊かな森や泉、渓谷や滝を形成し、海岸平野を抜けて海へ注いでいます。

島の東部には、ブルーマウンテンと呼ばれる主要な山脈がそびえ、その最高峰は2256メートルにも及びます。

何故「ブルーマウンテン」と呼ばれるかについては、前頁の写真の通り青空に溶け込むように青く美しい山系が広がるからです。

このように山岳地の多いジャマイカには、全長千キロ以上にも及ぶ入りくんだ海岸線や、自然湾、閑静な入り江、美しい砂浜、断崖の他、温泉や鍾乳洞が点在し、動植物の多様性にも富み、

カリブ海中で最も自然の豊かな島として広く全世界に知られています。

こういった豊かな自然環境は、ジャマイカの重要な財産で、観光産業やサービス業はジャマイカのGDP(国内総生産)の七割をも占めているのです。

ジャマイカのその他の産業は、ボーキサイトやアルミナ(酸化アルミニウム)、石灰石といった鉱業、砂糖、バナナ、コーヒー等の農業、さらに近年では衣類加工などの軽工業も活発になってきています。

一人当たりGNI(国民総所得)は約4000ドル(2007年推定)、物価上昇率は6.6%(2007年)と、途上国の中では経済は安定的な推移をみせていますが、いまだに10%にも及ぶ失業率の改善や公的債務問題の改善、貿易赤字の改善、エネルギー源の多様化、農業の多様化など、今後の経済発展の為には取り組まなければならない問題も多く残っています。

ジャマイカの気候は、海拔や時期、時間帯によって様々です。

熱帯に位置するものの、北東貿易風によって、低地の海岸線でも温度や湿度は常に緩和され、年間平均気温は27℃と過ごしやすく、海拔900メートル前後の中央高地ではさらに平均気



温は22℃まで下がります。

多雨期は5月と10月と11月で、年間降雨量は地域によって異なりますが、平均では約2000ミリです。

火山性の島ということもあり、土壌は肥沃で水はけも良く、山岳部の険しい地形環境を除けば、島民に自給性の高い、暮らしやすい生活環境を与えてくれています。

さて、ここまでの気候情報で気がついた方も少なくないと思いますが、ジャ

マイカの高地はまさにコーヒー栽培にとっても最適な環境と言えるのです。

ただし、御周知の通りここ近年カリブ海域の島々は気候温暖化によって大型化するハリケーンによる深刻な被害に見舞われており、政府も島民生活の安全性の確保に追われているのも現状です。

ここで、コーヒー生産の話に進む前に、ジャマイカの生い立ちについて概要を説明しておきましょう。





住民の80%以上を占めるのはアフリカ系。



山岳地帯に広がるコーヒー農園。

## 楽園に繰り広げられた抗争の歴史の中に芽生えたコーヒー産業

考古学研究によれば、紀元600年頃には、すでに南米北海岸から移住したと考えられるタイノインディアンが住んでいたことが立証されています。

もちろんそれ以前にも、この島にはカリブ族と言われる海洋民族が暮らしていたと考えられていますが、学術的

には紀元7世紀以前のことは詳しく分かっていません。

タイノ族の起源は、アンデスの部族コラ族(Colla)から派生していると考えられており、南アメリカからカリブ海全域に渡って使用されるアラワク語族の一員として、紀元6世紀頃までに大アンティル諸島とバハマ諸島全域に進出し、先住のカリブ族を追いやって島々に定住したと考えられています。

優れた農耕技術、漁業技術、さらにダンスや球技など独自の文化を持ったタイノ族は、以降900年もの長きに渡って楽園の地に繁栄し続けます。

繁栄時のタイノ族の人口は数万人とも数十万人にも及ぶとも言われていますが、詳しいことは未だに分かっていません。

1494年、クリストファー・コロンブスが二度目の航海でジャマイカ島に上

陸しました。

コロンブスはこの島のことを「これまでに見たことがないほど美しい島」と記述しています。

「ジャマイカ」という名前は、タイノ語で「森と水の国」という意味の言葉から付けられました。

以降ジャマイカはスペイン領とされ、1510年からスペイン人たちの入植が始まります。

タイノ族の人々は土地を奪われ、スペイン人たちの町造りやプランテーション開拓の為、奴隷労働者として扱われることとなります。

多くのタイノの人々が重労働、搾取、飢え、暴力、そしてヨーロッパから持ち込まれた様々な病原菌への抵抗力不足のために命を落としていきました。

異民族に奴隷として仕えるよりも自ら命を絶つた者もいました。

スペイン人の入植当初、入植者は殆ど男性でしたので、タイノ人とスペイン人の混血も一部進みましたが、純粋なタイノ人は、コロンブス上陸から僅か50年の間に絶滅してしまうこととなります。

タイノの人々が話したアラワク語は、現在でも多くの言葉に残っています。例えば、「ハンモック」「ハリケーン」「タ





バナナのシェードツリーに守られたコーヒー農園風景。

バコ」「パーベキュー」「カヌー」などです。スペインの統治は150年以上続き、ジャマイカにはこの間絶滅したタイノ人の労働力を埋めるために、西アフリカから大量の奴隷が投入されることとなります。

一七世紀、カリブ海の制海権はスペインから徐々に英国へと移りつつありました。

1655年、イギリス海軍は遂にス

ペインからジャマイカ島を奪うこととなります。

イギリスはこの後、スペインの金銀貿易を妨害するため、ジャマイカに非合法な組織を置きそれを黙認、援護します。

いわゆる「カリブの海賊」です。イギリスの後ろ盾に支えられた「海賊」という名の非合法軍隊は、スペインのガレオン船(金銀貿易船)を次々と襲



美しく咲いたブルーマウンテンの花。



成熟したブルーマウンテンの実は最高級品種にふさわしく美しい。

い略奪を繰り返し、一七世紀後半からジャマイカは一気に好景氣を迎えます。砂糖や果物の大規模なプランテーションが林立し、奴隷の需要もますます膨れ上がります。

奴隷労働者の扱いは凄惨を極め、当時農園で働きはじめた奴隷労働者の寿命は平均僅か7年であったという記録がその凄まじさを物語っています。

ジャマイカのコーヒー農園もそういった背景の中で開かれてゆきました。

1715年、カリブ海仏領・マルティニーク島に移植されたコーヒーの苗が、1732年英国人の手によってジャマイカに持ち込まれ、品質を重視する英国人たちによって山岳地の麓に農園が開

かれたのです。

もちろん、他のプランテーションと同じく大量の奴隷労働者が投入され搾取と暴力の舞台となったことは、言うまでもありません。

幾度もの暴動や反乱を繰り返した後、世界的な奴隷制度廃止運動にも助けられ、1834年遂にジャマイカで奴隷制度が廃止されます。

300年以上にわたってスペインと英国がアフリカから奴隷労働力を調達し続けてきた経緯から、現在でもジャマイカの人口の80%以上はアフリカ系です。

一九世紀以降は、直轄植民地制度に反対するアフリカ系ジャマイカ人の替わ





パーチメントの状態で天日乾燥場に広げられたブルーマウンテンコーヒー。

りにインドや中国、中東から多くの移民が契約労働者として入植することとなり、ジャマイカは多様な人種、多様な価値観を抱える独自の体質を持つようになるのです。

二〇世紀のジャマイカは独立に向けての抗争の時代となります。

特に1930年代、世界経済の不況を背景に統治を強める宗主国英国に対して、労働者たちによる多くの反乱や

暴動が勃発します。

各地に労働組合が組織され、それらに関連して新たに民主的な政党が形成されてゆきます。

こういった労働組合主導者と民主活動家の活動により、1944年、国民の普通選挙権を認める新憲法をもち、1962年遂にジャマイカはイギリス連邦の中で完全な主権を持つ独立国となったのです。

こういった国民たちの不屈の精神が、現在のジャマイカの独自性にも繋がっています。

多民族それぞれの文化や宗教を尊重し、「Out of Many, One People」をスローガンに、結束しているのです。

西アフリカ言語の影響を強く受けた独自のバトア語や、世界中を席巻したレゲエ音楽に代表されるラスタファリアン文化など、ジャマイカは強い個性の国とすることが出来ます。

### ジャマイカのコーヒー産業

ジャマイカのコーヒーの代表は何と言ってもブルーマウンテンです。

一八世紀にマルティニーク島からジャマイカに持ち込まれたコーヒーはアラビカ種の中では原種に近いティピカ種でした。

ティピカ種は、他のアラビカ種に比べると、成長が遅く、病虫害に弱く、栽培環境もセンシティブで生産者にとって扱い難い品種とされていますが、その分味や香りに優れ、バランスの良い風味を持つ高品位の豆です。

ジャマイカのブルーマウンテンの麓は、気温、湿度、偏西風、降水量、昼夜の温

度差、さらに水はけの良い地質と斜面というコーヒー栽培に最適な環境を与えたのです。

以来、ジャマイカのコーヒー栽培はこの地域での高品位コーヒーの栽培が継承されてきました。

やがて奴隷解放による労働力不足や農園拡大による土地の侵食が原因で、ジャマイカのコーヒー生産は一九世紀後期から衰退の一途をたどりました。

しかし1943年、現在のジャマイカコーヒー産業の生みの親とも言われるイギリスの農業アドバイザー、A・J・ウエイクフィールドがコーヒー産業復興計画を作成、それに基づいて1948年にコーヒー産業公社(Coffee Industry Board)が設立され、世界最高品質のコーヒー栽培の体制が築かれます。

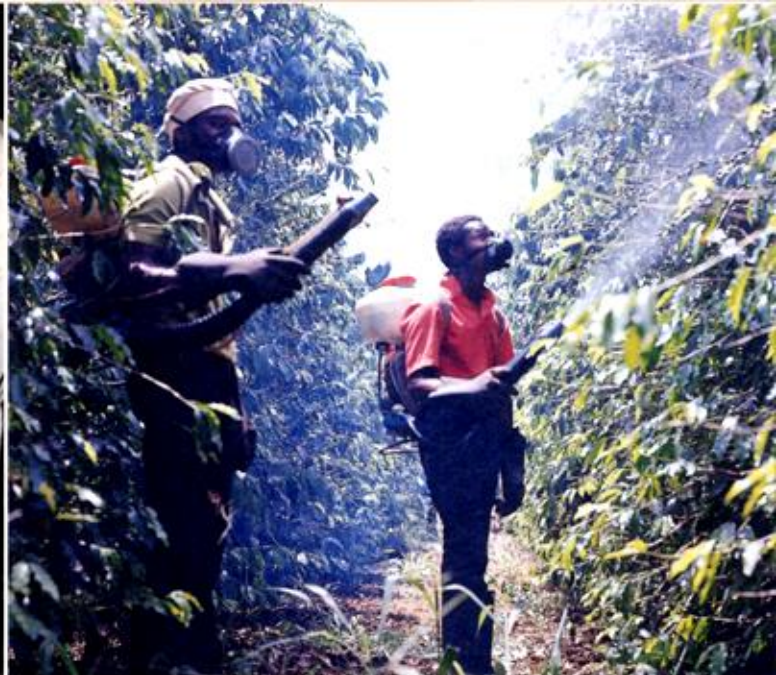
1953年、ジャマイカ政府はブルーマウンテン山脈の標高800メートルから1200メートルのエリアを法律によってブルーマウンテン・エリアと定め、ブルーマウンテン・コーヒーの名称をこのエリア内で生産されたコーヒー以外には使用してはいけないことを決めました。

こうしてジャマイカは高品質コーヒー生産国の地位を確立し、現在に至るの





ブルーマウンテンの樽詰め作業。世界のコーヒーの中でも樽詰めにして輸出されるのは、ジャマイカ産のブルーマウンテンとハイマウンテンだけである。



結実期の丁寧な消毒風景。ブルーマウンテンコーヒーは残留農薬がないことでも知られている。

## 日本人とブルーマウンテン

日本にブルーマウンテン・コーヒーがはじめて輸入されたのは戦前のことですが、非常に僅かな量に過ぎなかったようです。

本格的な輸入が始まったのは昭和28年のこと。

年間50トンという僅かな数量でした。

これまで経験したことのない「味」「香り」「コク」の均整のとれたバランスとすっきりとした風味は日本のコーヒー愛好家を虜にしました。

以来ブルーマウンテンは日本の市場の中で最高級ブランドとして、コーヒー専門店に定着し、日本のコーヒーファンの憧れとして位置づけられるようになりました。

現在、ジャマイカの年間コーヒー生産量は僅かに2400トン(2006/2007年度・ICO調査)に過ぎません。内およそ4分の1が国内消費で、残りの輸出分の70%近いおよそ1100トンが我が国日本に輸出されているのです。

決して多い数量ではありませんが、平均取引単価を見てみると(2006年度・平均輸入単価)他の中米・南米産のおよそ十倍もの価格で取引されています。

ます。

世界のコーヒー消費国の中でも、とくに高品質指向と言われる日本人にとって、ブルーマウンテン・コーヒーはまさに究極のコーヒーの姿として受け入れられ続けているのです。

## ジャマイカ・コーヒーの未来

前述したように、二〇世紀後半から、ジャマイカのコーヒー生産はコーヒー産業公社によって、栽培・加工(水洗)・精製・等級選別・品質管理・船積・外国為替管理といったすべての生産プロセスが管理されています。

さらに、コーヒー産業開発公社(CIDCO)によって、育苗、栽培・収穫指導が行われ、小規模農家の集合体である生産者組合をしつかりとまとめあげています。

生産豆の種類はブルーマウンテン・コーヒーを頂点に、ハイマウンテン・コーヒー、プライムウォッシュ・コーヒーとあり、ごく限られた地域のみでしか生産できないブルーマウンテン・コーヒー以外のものは、些少なから増産の傾向にあります。

丁寧な栽培、手摘み、水洗加工、選別作業など、まさに手仕事による品質



保全は今や伝統と言えますが、実際には消費国からの需要に応えきれないというのが実情です。

新産地開拓には難しい険しい産地の地形や加工流通などのインフラ整備など、増産に対応するための国力という意味では、ジャマイカの現状ではまだまだ厳しい状況であると言わざるを得ません。

しかしながら、スペシャルティコーヒーやグルメコーヒーなど、近年の世界的な高品位コーヒー需要の流れをみれば、その先駆者とも言えるジャマイカのコーヒー産業には、大きな進化が期待できるのではないのでしょうか。